

異文化理解を研究する

ー 日本のイスラームを例として ー

Komura Akiko

小村 明子

奈良教育大学 国際交流留学センター

異文化理解を研究する

ー日本のイスラームを例としてー

奈良教育大学 国際交流留学センター 小村 明子

1. はじめに

奈良教育大学では、文化について学ぶ講義がいくつかあります。また、市民講座として異文化理解をテーマにした公開講座を開いています。教育とは関係のないテーマと思われるかもしれませんが、多くの学生が文化の講義を率先して取り、授業を熱心に聴いています。単位取得とは関係なくても、異文化理解についての公開講座に参加しています。なぜでしょうか。それは日本が多文化社会へとその道を進んでおり、事実、小学校や中学校では外国の宗教文化を持つ子どもたちがいるからです。

2003年からの日本政府による観光招致政策によって外国人観光客が増加しています。また2020年までに日本で学ぶ外国人留学生を30万人に増やそうという政策によって日本で学ぶ外国人も増えました。さらに、技能実習制度を利用して海外から多くの労働者がやっています。2019年4月には、常に人手不足であった14の職種に対して就労ビザを発行するという「外国人材受入れ制度」が施行されました。この制度によって日本で働く外国人がさらに増加することとなりました。

海外から人が日本にやってくるということは、その人の保有する宗教文化もまた日本に入ってくることを意味します。特に1980年代後半から日本に滞する外国人のムスリム（イスラム教徒）が増加しました。これに伴い、これまで多くの日本人にとって遠い存在だったイスラームが、日本国内で身近に感じられるようになりました。まず、学校現場ではムスリムの子どもたちが増えて

います。観光地ではムスリム女性の象徴でもあるスカーフを頭に被った人たちを見ることができます。ムスリム観光客の増加は、ムスリム対応を迫られる状況を作りました。その理由は、ムスリムは豚由来の食材や飲酒、またアルコールを材料にした調味料などを口にすることが禁止されているからです。そこで、観光地や大都市では彼らが安心安全に飲食できる「ハラール（ハラル）」対応の食事を提供するレストランが増えています。このハラールについてはニュース報道で何度も取り上げられているので、多くの人たちが知っていると思います。

日本でイスラームを身近に感じるようになったのは、ここ近年のことだと思われることでしょう。ですが既に太平洋戦争前には、植民地政策に活かすために日本政府によって「回教政策（イスラーム政策）」が始まっており、イスラーム研究が行われていました。日本はこの時から積極的にイスラームを知ろうとしていたわけです。

ところが現在の日本社会では、ムスリムの姿をよく見かけるようになったにもかかわらず、イスラームを身近に感じたことはないからイスラームといわれてもよく知らないという人もいます。なぜでしょうか。一般的に、イスラームには「テロ」などの負のイメージがあることがいわれています。それゆえに、無意識のうちに避けているのかもしれませんが。また、宗教それ自体に対するイメージも宗教団体による社会事件を思い起こさせることからあまり良いものではないともいわれています。

2. イスラームとは何か

では、実際にイスラームという宗教はどのような宗教でしょうか。皆さんは中東地域の宗教はイスラームだということを学んでいると思います。預言者ムハンマドによって開かれた一人の神を信じる宗教で、スンナ（スンニ）派とシーア派に分かれている、イスラーム暦の9月にあたるラマダーン月には日中斷食をする、現在のサウジアラビア王国にあるメッカ（アラビア語では「マッカ」）に巡礼に行く。これが学校で教わっていることではないでしょうか。ですが、イスラームという宗教はこれだけではありません。

イスラームという宗教教義の根底には「六信五行」という、ムスリムが信じなければならない6つの項目と、義務として行わねばならない5つの行為があ

ります。表 1 で簡単に説明しました。

六信		五行	
唯一神 (アッラー)	神はただ一人であり、この唯一神を信仰すること。	信仰告白 (シャハーダ)	複数のムスリムを証人として同席させた上で、イスラームに改宗することを宣言すること。なお、決められた文言を3回以上唱える。
天使 (マラーイカ)	天使の存在を信じること。	礼拝 (サラート)	1日に5回決められた時間に行う礼拝のこと。
啓典 (キターブ)	イスラームの聖典「クルアーン」の他にも、ユダヤ教の「タウラー(モーセの律法)」や「ザブール(詩篇)」、キリスト教の「インジール(福音書)」も啓典とされる。	齋戒 (サウム)	イスラーム暦の9月であるラマダーン月に行う断食のこと。それ以外にもイスラームにとって重要な日に断食をする者もいる。断食は日中太陽が昇っている間に行われる。
預言者 (ラスール)	神から下された言葉を預かる者のことである。預言者はムハンマドだけでなく、モーセやイエス・キリストも含まれる。	喜捨 (ザカート)	ラマダーン月に貧しい者に対して、施しをする。この時の施しを「ザカート」と呼ぶ。なお、この月以外にする施しのことを「サダカ」という。サダカは任意の施しである。
来世 (アーヒラ)	最後の審判を受けた後に行く、来世(天国と地獄)を信じること。	巡礼 (ハッジ)	現在のサウジアラビア王国内にある聖地メッカ(マッカ)に巡礼すること。
定命 (カダル)	人間の運命はあらかじめ神によって決まっている。それを定命という。		

表 1 イスラームの六信五行 (括弧内は、アラビア語のカタカナ表記)
(出典：小村明子作成)

元々イスラームは中東で生まれた宗教です。それが時代を経て世界中に広まってきました。ではどうやって広まったのかといえば、2つの広がり方があります。一つは戦争によって領土を拡張していったこと、もう一つは交易活動によって広がっていったことです。交易活動は平和的な広がりです。時間はかかりますが、穏やかにイスラームが各地に入り定着することとなりました。イタリアからトルコを抜けて、中央アジアの各地を経て中国に向かうシルクロードはみなさんご存知のことと思います。かつてシルクロードの交易路にあった都市では、今も多くのムスリムが居住しています。また、海のシルクロードも同様です。その起点となるアラビア半島の南、現在のイエメンの地域は「ハドラマウト」と呼ばれており、その地域からインド洋を経てマラッカ海峡、そしてインドネシアやフィリピンへ至る交易路も発達しました。その結果、現在東南アジア地域にもムスリムが多く住んでいます。

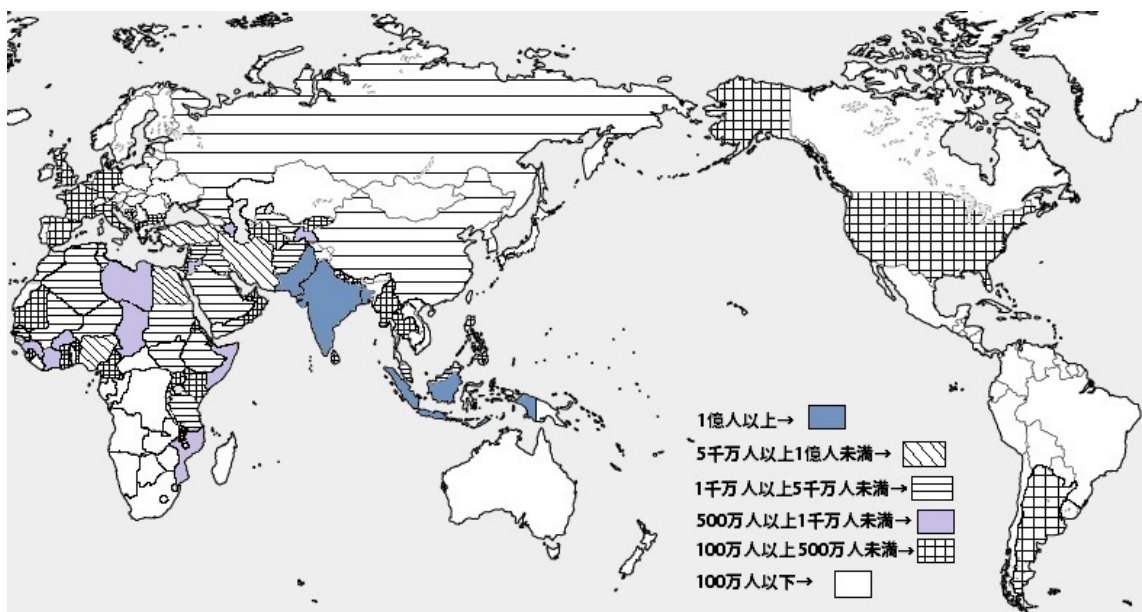


図1 出典:小村明子『日本とイスラームが会うとき—その歴史と可能性』2015年、現代書館、23頁。

この世界的な広がりによって、イスラームは多様性を生み出しました。例えば、宗派です。イスラームには、大きく分けてスンナ（スンニ）派とシーア派に分けられます。スンナ派は広範囲に広がっています。シーア派は、現在のイランおよびイラクの一部に広がっています。さらにこの両派から「イスラーム法学派」という学派によって分けることができます。ムスリムの行動規範はイスラーム法（シャリーア）の解釈で規定されます。イスラームの聖典である「クルアーン（コーラン）」と預言者ムハンマドの言行録である「ハディース」の解釈によるのです。解釈は複数のイスラーム知識人によって行われます。ところが、解釈は微妙ですが違ってきます。そこで、その微妙な違いから複数の学派に分かれていくようになりました。日本はスンナ派のムスリムが多いので、ここではスンナ派の法学派を紹介していきます。

スンナ派のイスラーム法学派は、表2の通り4つの法学派があります。また、地域ごとにも分けることができます。

- ① **ハナフィー派**：主に、中央アジア、トルコ、シリア（ダマスカス以外）、パキスタン、中国など。
- ② **マーリク派**：主に、北アフリカのチュニジア、アルジェリア、モロッコの、いわゆるマグリブ地方。
- ③ **シャーフィイー派**：主に、エジプト（カイロ）、シリア（ダマスカス）、東アフリカ、東南アジアなど。
- ④ **ハンバル派**：アラビア半島を中心に、どの地域も網羅している。

表 2 スンナ派のイスラーム法学派（出典：小村明子作成）

解釈の違いによって、できることとできないことが出てきます。その上に、地域の土着文化とイスラームが融合しているところもあります。それゆえ、イスラームといっても完全に同じということではありません。宗教ですから、信仰への熱意も個人それぞれ異なります。信仰に厚い人であればあるほど教義を厳格に守ります。イスラームが多様であるという理由はここにあります。

現在世界のムスリム人口は、2020年の数値では19億人いるといわれています。また現在ムスリム人口が多い国は、インドネシアです。2019年の数値ですが、約2.7億人の人口のうち87%がムスリムであるといわれています。また、人口比率で一番多い国はパキスタンです。2017年の数値となりますが、96.74%であるといわれています。では、日本はどうでしょうか。どれくらいムスリムがいるのかといえば、法務省入国管理局の在留資格から追うことができます。正規入国者数で、就労目的のビザを取得していることで日本のムスリム人口数がわかるのです。

3. なぜ実際にムスリムにインタビューするのか。

数字で物事を表すとわかりやすさもあって、ニュースでは必ずといって良いほど数値を出して報道します。また、数値を出すことによって伝えた内容の信憑性が高くなります。そのために、数値だけで視聴者が納得してしまう傾向が強いこともいえます。ただし、その数値だけでは実情はわかりません。

国内の外国籍のムスリム人口は、先ほど述べた各国の人口比率によって算出することができます。では、日本人ムスリムの数はといえば、外国籍の人の所

有する「日本人の配偶者など」というビザから算出します。家族に日本国籍の人がいることから日本での滞在が認められているビザです。これに各国のムスリム人口比率で計算して、数値を算出するのです。また、日本各地にある Masjid（「モスク」のこと）は登録制ではないため、所属するムスリムの人数を正確に出していないところが多いのですが、どれくらいの人数のムスリムが利用しているのか調査することでも大体の数値をつかめます。こうして数値が算出されるのですが、その数値を見たときに疑問を感じました。実態とはそぐわないからです。ではどう違うのか。それを知るためには、イスラームという宗教の教えについての知識を得ることと、人間の社会文化を研究する学問である文化人類学の調査方法を行うことでわかります。調査方法とは、ムスリムに直接尋ねるインタビューと、実際の生活や儀式などに参加させてもらって第三者の視点から観察する参与観察と呼ばれる研究方法です。

まず、イスラームの宗教教義から説明します。イスラームでは、ムスリム男性と結婚するキリスト教徒とユダヤ教徒の女性はイスラームに改宗しなくても良いという宗教規定があります。ですので、キリスト教徒である日本人女性は改宗する必要はありません。また、ムスリムの両親を持つ子どもたちは生まれながらのムスリムであるため、先に述べたイスラームの五行のうち、信仰告白の儀式を行う必要はありません。

このイスラームの教えから考えると、日本人女性がムスリム男性と結婚した場合必ずしもイスラームに改宗しないこともあるといえます。実際に、私が知り合ったアラブ系のムスリム男性によれば、彼の配偶者である日本人女性はもともとキリスト教徒として生きてきたこともあったためイスラームに改宗していないと述べていました。また、ムスリムの子どもたちの人数となると単純にはいきません。イスラームでは子沢山が良いといわれていることもあって、イスラーム地域に住む家族は大家族であることが当たり前となっています。ですが日本は違います。実際問題として、日本では得られる収入で生活ができないという理由から子どもが一人というムスリムの家庭があります。また、子どものいない家庭もあります。それゆえ、一家族あたりの子どもの人数はおおよそこれくらいだろうと推測するしかないのです。統計調査によるムスリム人口の数は、残念ながら推定値であるといえます。

ただ、実際に日本のムスリム人口は増加しています。冒頭でも述べましたように、日本はムスリム留学生やムスリムの外国人労働者を積極的に受け入れているからです。では、どのようにして彼らの実状を知ることができるのでしょうか。

私はこれまでに日本のムスリムたちにインタビューをしてきました。先ほど述べた文化人類学による調査です。労働力として来日した外国人ムスリムに話を聞くと、ごく普通の日常生活を送っています。何か苦労があるかと聞くと、仕事がきついという話が多く、また休日はゆっくり寝たいという人もいます。ムスリム留学生は日本を満喫しています。和装で街を出歩いたり、美味しいスイーツのお店があると聞けば、友人と一緒に رفتったりしています。

では、日本人ムスリムはどうでしょうか。主に、マスジドに通うイスラームに改宗したムスリム女性たちから聞いたところでは、ムスリム男性と付き合うようになってからイスラームを知り、学ぶうちに改宗したという日本人女性や、結婚をきっかけとして改宗したという人もいます。イスラームに改宗する理由の多くは、ムスリムとの交際や結婚がきっかけとなっています。ですが、しばらくすると彼女たちの姿をマスジドで見かけなくなります。それは、子どもが小さいから、仕事が忙しいからという理由からですが、中には離婚したことを理由に、イスラームから離れたことを理由とする人もいました。

このように、実際にインタビューすることで、ムスリムの実状を知ることにつながります。ただ、ここで気になったことがあります。それは離婚したからイスラームを離れると考えることです。「坊主憎けりや袈裟まで憎い」という言い回しがありますから、元の配偶者の宗教であるイスラームから離れたいという気持ちが生まれて当然なのかもしれません。ですがイスラームに改宗するということは、自分の一生をイスラームという宗教に捧げることを意味します。安易な考えでイスラームに改宗できるものではないのです。たとえムスリムの配偶者と離婚することでイスラームを続ける動機がなくなったとしても、信仰告白した限りにおいては、ムスリムであり続けることになります。

離婚した女性たちは「イスラームから離れる」といっていますが、離れることによりイスラームの環境に居ることがなくなるために、ムスリムとしての自己（アイデンティティ）は薄らいでいってしまいます。いいかえれば、「ムスリ

ム」という自分自身は薄らいでいき、ムスリムとしての自分に戻るための何らかの機会がない限り、このままムスリムとして自覚することはなくなるわけです。では、なぜイスラームから離れていくのでしょうか。そこには日本人の、イスラームという宗教の理解がかかわっているのではないのでしょうか。

4. 日本人のイスラーム理解

そこで最後に、現在研究テーマとして取り組んでいる日本人のイスラーム理解について説明しましょう。日本人のイスラーム理解は、明治時代にまで遡ることができます。明治維新の後に、日本はヨーロッパの文化を吸収して世界に負けない国にしようとしていました。ですので、まずはヨーロッパの文献を翻訳して、世界の様々な宗教文化を知ることから始まりました。イスラームも同様にどのような宗教なのか、まずはヨーロッパの文献を翻訳した中で記されていくようになりました。後に、日本人の宗教学者や知識人の著書にも、世界の宗教を説明する記述の中でイスラームが記されるようになっていきました。ただし、その記述をよくみると、イスラームの信仰の根底となる「六信五行」の説明が一定していませんでした。後に、ムスリムが信仰すべき対象である六信については、統一された記述になっていきます。ところが五行については、なかなか統一された記述になりません。複数の文献では、五行のうちの信仰告白が除外されて記されていました。もしくは信仰告白の説明がされていても、「行為」にはあたらないと説明する文献もあります。なぜなのでしょう。それは、当時イスラームの記述を書いた著者たちにとって宗教は「修行が伴うものである」という発想があったからだといえるのです。信仰告白は宣誓です。したがって仏教のように、修行で己の精神を鍛える行為ではないとして捉えていたことが当時の文献から読み解くことができます。なお、他の4つの義務行為については「修行」とみなされてしっかりと説明されています。これが何を意味しているかといえば、仏教など他の宗教と比較しながら、イスラームの六信五行や宗教教義を理解していたということになります。

では、現在の日本人も同様に他の宗教と比較しながらイスラームを理解しているのでしょうか。宗教の知識がない限りは、イスラームと比較することはできません。概して、多くの日本人は「無宗教である」といいます。ところが、

完全に何も信じていないとはいえるのでしょうか。お正月には神社仏閣に行き、何かお願い事があれば願掛けをします。おみくじを引いて一喜一憂しますし、御朱印帳を常に持ち歩いて御朱印集めをしている人もいます。こうしたことは「宗教性（スピリチュアリティ）」という言葉で括ることができます。すなわち、日本人は宗教性を持っていますが、特定の宗教団体に所属することや特定の宗教にコミットすることを嫌います。なんとなく宗教的な何かをしているという人が多いといえるのです。こうした現代日本人の宗教性を考えると、イスラームという宗教を理解するにしてもその人の知っている他の宗教と比較することができるのかといえ、その人が「無宗教である」と述べる限りは困難であるといえるでしょう。では、イスラームを他宗教と比較することなく、そのまま理解できるといえるのでしょうか。どのようにイスラームを理解しているのかといえ、更なる研究調査が必要となってくるのです。

5. おわりに

日本社会はすでに多文化社会へと移行しています。日本には数多くのムスリムが暮らしています。そのムスリムの実情を知るために、インタビューや参与観察を行います。ここに記載したことは、日本のイスラームのほんの一部です。日本とイスラームとの出会いは明治時代から始まります。近年の外国人ムスリムの滞日は日本のムスリム人口を増加させることにつながりましたが、日本とイスラームとの関係性の歴史はそれ以前からあるのです。また、滞日外国人ムスリム数の増加は様々な課題を生み出しています。今後も課題が出てくれば、どうしてそうなったのか、どこが問題点なのか、などを調査することとなります。

実際の状況を知って理解することが本当の意味での異文化理解となります。また、こうした研究成果を異文化理解の講義として学ぶことで、皆さんの将来につながっていく、すなわち皆さんが学んだことが社会の礎となり、より良い社会の構築へとつながっていくのです。

小村 明子 (Komura Akiko)

2012年 上智大学大学院 グローバル・スタディーズ研究科
地域研究専攻博士後期課程単位取得満期退学
地域研究 (博士)

2018年 立教大学社会学部 兼任講師

2021年 奈良教育大学 国際交流留学センター 特任講師



【研究テーマ】

文化人類学で、異文化社会におけるイスラームを研究しています。特に現在は、日本のイスラームについて研究しています。戦前の歴史資料を読み込んで調査するだけでなく、日本のムスリムたちに会ってインタビューしたり、彼らと一緒にイスラームの行事に参加したりと、彼らと一緒に時間を過ごすことでムスリムの生活を知って理解することに取り組んでいます。

【好きな映画】

「アラビアのロレンス」

非常に長い映画で、休憩を挟んで観る映画です。第1次世界大戦前から戦間期にかけての歴史上の人物です。砂漠の広がる幻想的な風景が印象に残っています。世界史が好きな人におすすめです。

「インデペンデンス・デイ」

1996年に上映された一作目をおすすめします。上映当時は英語を猛勉強中で、この映画の英語のセリフ集を入手して全てのセリフを丸暗記したことを覚えています。映画では、大統領や政治家、街中の人びとが主役です。彼らが日常的に使用する英語を学ぶこともできます。特に大統領の演説シーンのセリフは、今でも覚えています。

【座右の銘】

「高い志」

大学院時代に恩師から頂いたお言葉です。「地域一」でもなく「日本一」でもなく「世界一」をとるよう努力することを意味します。単なる志ではありません。志を高く持てば、たとえ「世界一」になれなかったとしても「地域一」「日本一」に自ずとなっている可能性があります。また、世界を目指すと、多少の挫折にはへこたれません。

異文化理解を研究する ―日本のイスラームを例として―

著者 こむら あきこ
小村 明子

2022年4月1日 第1版

奈良教育大学出版会

〒630-8528

奈良市高畑町

TEL: 0742 (27) 9343 FAX: 0742 (27) 9147

E-mail: g-kenkyu@nara-edu.ac.jp

URL: <https://www.nara-edu.ac.jp/PRESS/>